レソト留学
-アフリカを知るために-
Study in Kingdom of Lesotho:
To Know the Real Life in Africa

東京外国語大学卒　末永 純平
SUENAGA Jumpei (Tokyo University of Foreign Studies graduate)

キーワード：海外留学、アフリカ、レソト、私費留学

私は 2012 年３月～11 月までの９ヶ月間、南部アフリカのレソト王国という小さな国に留学していた。知名度の高くない国であるし、そもそもアフリカに留学すること自体あまり一般的ではないだろう。多くの人にとって恐らくあまり馴染みのない私の経験が、新しい留学の形を考えるきっかけになれば幸いである。

１．留学に至るまで

レソト行きを決める

「国際協力がしたい！」と考える学生は多いのではないかと思う。私もそういった学生の１人であった。東京外国語大学では在学中に１年間の留学に行くことは一般的であったので、大学入学当初は開発学を学ぶためにイギリスに留学することを考えていた。

しかし､大学での授業を通じて現在最も貧しい地域がアフリカであることを知ると、私の関心はアフリカに向かっていった。3 年時からはアフリカ地域研究ゼミに所属し勉強を進めたのだが、理解が中々深まらなかった。自分の生活と違い過ぎていて、イメージができなかったのである。途上国の人々の力になりたいと思っていても、そもそも人々がどういった生活をしているのか全く分かっていないことに気づかされた。何かをしてあげようとするのではなく（そんな力もないのだが)、まず知ることから始める必要があると思い、アフリカ留学を考え始めた。大学内では極めて少数派であったものの、幸いゼミの先輩にはアフリカに留学していた方が多くいたため、決心するのに時間はかからなかった。

一言にアフリカと言っても 50 以上の国がある｡当初はなんとなく南アフリカへの留学を検討していたが、先生にレソトを提案された。発展している南アフリカよりも、田舎のレソトの方が私が知りたいと思っているものを感じられると考えてくださったのだろう。先生に紹介して頂いた在日レソト大使は日本人学生のレソトへの留学に前向きであったので、受け入れてもらえない心配はなさそうであった。また、ゼミの先輩にも留学の前例がなく、在留邦人が外務省によれば４人と極めて少ない点に面白味

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

も感じ、レソトに留学することを決めた。

留学準備

留学を決めたら当然準備をしなければならないわけだが、前例がないため情報もなく何をすればいいのか正直分からなかった。まず大学の講師の方と2人で大使館に赴き、大使に留学時期と経済学部入学の希望を伝え、現地の情報も聞いた。受け入れ先のレソト国立大学（National University of Lesotho:以下NUL）は前年にストライキがあったため大学のスケジュールがずれ、見通しが立たないような状況であったが、大使によれば私には柔軟な対応をしてくれるようであった。

その後はNULに志望動機書や履歴書をメールで送ったくらいで、それ以外の事務的な手続きは特になかった。私も行けばなんとかなるだろうと思っていたが、不安だったのは学費で、メールで問い合わせをしても「学費は入学し次第決める」と言われていた。確かな金額が知りたかったので、直接電話もしたが同様の返事であった。留学の1月前ほどに､大学の講師の方が現地に赴き大学間の調整をしてくださったのだが、その際も学費については同様の返答であり、留学にいくらかかるのかは現地に着くまでわからなかった。

手続き以外では、アフリカに留学していた先輩の話を伺い、予防接種を3本ほど打ったくらいだ。なるべく現地の人々と同じ生活をしたいと思っていたので、あまり日本からたくさん物を持っていきたくなかった。その結果風邪薬さえ持たずに私はレソトへと旅立った。

２．レソトでの生活

空港に降り、山肌がむき出しの山々しか見えない景色を見た時は、本当に同じ地球なのかとさえ思った。大学に着いても肌が黒くないのは私だけで、当初周りはジロジロと私を見てきた。しかしながら、フレンドリーな人が多く皆助けてくれたので、生活にはすぐ慣れていった。

大学の授業

まず入学と履修の登録をしなければならないのだが、気にしていた学費は履修した授業数によって変わるものであった。授業は主に経済学と開発学のものを受講した。NULにとって私のような短期の留学生受け入れは初めてであったので、留学生の制度は整っていなかった。そのため私は学部・学年問わず好きな授業を受講することが許されたのである。

授業形態はそれほど日本と変わらず、先生がホワイトボードや時にパワーポイントを使いながら講義を行うものであった。レジュメは代表の学生数人に配られ、他は彼らからコピーして使った。日本の大学で経済学や開発学を学んでいたわけではないので比較は難しいが、レソトの授業の質が低いと感じたことはあまりない。学生はむしろ非常に真面目で、毎晩遅くまで勉強している友人も多くいた。授業中も意見が飛び交い、日本の授業より活気があったように感じた。

課題はグループワークが多かった。印象的だったのは、学生のグループでの作業の仕方である。与えられた設問１つ１つに対して、１つのノートパソコンを見ながら全

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

員で議論する。どの設問も皆が考えられるのはいいとは思うのだが、とてつもない時間がかかるので結構大変だった。

日本の大学での単位には認定されないが、私はテストも受け、受講した全ての授業で単位を取得した。ただテストは教科書の丸暗記が求められるような設問が多く、個々の考えを表現できる場はあまりなかった。教科書を教科書として使うだけではなく、もっと批判的思考が求められるようなテストや授業であるほうが、高等教育には相応しいのではないかと思った。

レソト国立大学

学業以外の活動

現地の人々と同じ目線に立ち、アフリカの生活を肌で感じることが目的であった私にとってはこちらの方が重要であった。授業のない時間には主に、筋骨隆々の友人たちと共にジムでウエイトトレーニングに勤しんだ。向こうでは人気のスポーツの1つになっている。それ以外ではもちろん予習や復習もしたが、友達とぶらぶらしたり、ごろごろしたり…。正直日本と比べて娯楽が非常に少なく、週末にお酒を飲むくらいだ。日本は物に恵まれているということを、身をもって理解することができた。

学生のボランティアサークルに参加もした。学内でエイズに関するイベントを開催したり、学生や教員から寄付を募り、ブランケットを購入し田舎の子供たちに配ったりした。アフリカの人々は助けられる側という固定観念を完全に払拭できずにいた私にとって、厳しい環境にある人々に手を差し伸べようとする地元の彼らの存在は、何も不思議なことではないはずなのだが非常に印象的であった。

学生ではなく農村の人々の暮らしを知るため、長期休業時には友人の実家を訪ね、家畜の世話に同行させてもらった。彼らは家畜にエサとして生えている草を食べさせるのだが、レソトは土地がやせているので勝手に食べさせると草を食いつくしてしまう。そこで飼い主（時に幼い男の子だったりする）が先導して場所を変えながら、エサを与えるのである。そのため早朝に出発し、夕方までは帰ってくることができない。私は3時間しか同行していないが、中々大変であった。アフリカの農業は重労働で余暇の時間が中々持て

大学近くの集落

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ない、という教科書の記述はこういうことだったのかと、経験して初めて理解することができた。

日本人の少ない国に留学したので、現地の日本人の方には大変お世話になった。そのうち2名は国連で働いていらっしゃる方で、実際の活動についてもたくさんお話を伺うことができた。留学先としてメジャーな国では起こり得なかった出会いだったと思う。帰国後も来日したレソトの首相と握手をする機会を頂くなど、レソトのパイオニアのような存在になっているのかもしれない。

３．今思うこと

何のために留学するか

私の場合留学の目的は学問でも語学力でもなく、リアルなアフリカを知ることだった。9ヶ月間の滞在を経てこの目的は達成されたと思っているし、知ることで生まれた問題意識から、「レソトにおける高学歴失業」をテーマとした卒業論文も執筆した。私のレソト留学は非常に有意義なものであったと自負している。日本と全く違う世界があるということを知ることができたのも、アメリカやイギリスといった先進国ではなくアフリカに行ったからこそである。

大学院進学や学部入学ならともかく、1年程度の留学で学問を深めることは難しいと思う。勉強は日本でもできるし、正直なところ第２言語よりも母語の方がどうしても理解は早いので、「開発学を学びにイギリスに1年間留学したい」と考えていた4年前の私のような人には、「それ日本でできるよ」と教えてあげたい。日本でやらないようでは、どこに行ってもやらないものだ。

多くの学部生は語学力、とりわけ英語の運用能力の向上を目指して留学に行くのだろう。アメリカやイギリス、カナダは英語を母語としており、英語の学習には最適のように思える。しかしながら英語は彼らにとって母語であるがゆえに、話しが流暢でとても速く聞き取ることが難しい。皆喋れてしまうがゆえに話しにくくなり、他の日本人とばかりいるようになってしまうという話も聞いたことがある。

そこで考えてほしいのが、それ以外の国である。世界には母語ではなくても英語で授業を行っている国はある。レソトもその１つで、大学では全て英語で授業を行っているので一般的な日本人学生より英語能力は遥かに高いが、ネイティブではない私でも、授業はゆっくりで聞き易く、話しやすい空気があった。また、日本人と会う機会も約束をしない限り全くなかったので、日本語に頼ることもできなかった。帰国後に受けたTOEICの点数は80点上昇しており、アフリカでの生活も英語力の向上につながっていたのである。

留学のためのサポート

大学からどういったサポートがあればいいか、と聞かれると回答に困ってしまう。私の場合煩雑な事務手続きも特になく、分からないままとりあえず行ってしまったので…。ただ留学は誰かに強いられるのではなく自発的に行くものなので、本気で行きたければ本人が調べるはずなのだ。今の世の中、情報は溢れている。

私はそれ以上に、東京外国語大においては留学に行くことが当たり前の環境であったことに感謝している。特別なことではなかったので、敷居も全く高くなかった。留

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学がより身近になるような機会が増えればいいのだと思う。

もっともっとたくさんの選択肢が当たり前のようになり、先進国に限らず世界の様々な国に学生が飛んでいくようになるといい。レソトのような遠い場所にも日本人がたくさん行くようになれば、世界での日本のプレゼンスも大分違ってくるだろう。途上国からだって学ぶことはたくさんある。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.